伝統や文化に関する教育の可能性（２）
― 必修科目「教育と日本の伝統文化入門」―

（平成 28 年 8 月 31 日提出，11 月 4 日受理）

Possibility of the education about a tradition and the culture（２）
―Required subject "The education and the traditional culture introduction in Japan"―

奈良学園大学人間教育学部
伊﨑　一夫
ISAKI Kazuo
Nara-Gakuen University
Faculty of Education for Human Growth

キーワード：人間力，伝統や文化の教育，言語活動の充実，国語科教科書教材，千利休

Abstract：The purpose of the this research is verifying the result of required subject " the education and the traditional culture introduction in Japan " which installed mainly a tea ceremony.The education of a tradition and the culture "associates" with "human resources" deeply.The human resources" is an attractiveness as the human being who has a rich experience and culture.The position has a tradition and a culture experience in Japan in the basis of " the human resources".The human resources" is improved because it enriches " the education of the tradition and the culture ".Sen no Rikyuu still the most revered figure in the history of the tea ceremony,or cha-no-yu,coined the term Wa-Kei-Sei-Jaku（Harmony,Respect,Purity,Tranquility）to define the principles of Chadou,the “Way of Tea”.Cha-no-yu is not about extravagance or ostentation.Perhaps the essence of the Way of Tea is in its imaginative expression of respect for guests. I did the device which takes Rikyu's thought in case of lecturing.It verified the result of the device by the comment about the student.

Keywords：Human potential, Education of a tradition and the culture, Improvement of language,
The national language department textbook teaching materials, Sen no Rikyuu

１．日本の伝統・文化に支えられた「人間力」

奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の教育上の理念・目的は「教育の連携性」と「教育の一貫性」に資する人材の育成である。その育成を「人間力」を基盤にして「教育力」「実践力」を加えたキーコンセプトに基づいて取り組んでいる。

本学部・学科では，「人間力」を社会を構成する一員としての「社会を構成する『個』」と「自己を確立する『個』」という２つの『個』を「社会の中で一人の人間」として調和的に生き抜く力である，と定義している。「社会を構成する『個』」を生きる力は，子ども一人ひとりが，世の中に主体的に参画し，責任を果たし，良き市民・社会人として活躍できる力である。「人間力」は，豊かな経験や教養に裏打ちされた人間としての魅力といえるものであり，我が国の文化や伝統がその基盤に位置付く。

我が国の歴史や文化に関する知識や認識は，平成 24（2012）年 8 月 28 日の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」においても，グローバル人材の土台となる能力として，その重要性が指摘されている。文化や伝統の中に位置付いている智恵は，予測困難な時代にあって，想定外の困難に処する判断力の源泉となる教養，知識，経験を与

える。我が国の先人たちが積み上げてきた文化や伝統を深く理解し，継承発展させることが「人間力」を高めていく。こうした「人間力」が，国際的な人類共同体で活動できる国際的コミュニケーション能力を高め，グローバル人材へと結びついていく。

「人間力」は，知･徳･体の調和がとれ，生涯にわたって自己実現を目指す自立を促し，我が国の伝統と文化を基盤として国際社会に生きる日本人のバックボーンとなるものである。自己を見失うことなく，自己研鑽に励み，困難を乗り越え，積極的に人生を切り拓き，社会参加していくために，日本の伝統・文化に支えられた「人間力」は必須である。「人間力」は，改正教育基本法の理念に基づく人間像であり，日本の伝統・文化の精神性，国際感覚，豊かな人間性を有する「生きる力」そのものである。

２．必修科目「教育と日本の伝統文化入門」の意義

本学部・学科の理念・目的をふまえ，「本学部，学科の特色」の第３項に，次の内容を掲げている。

(c)「人間力」の育成に関しては，「人間教育学」に加えて，我が国の伝統･文化に関する知識や理解，多元的な文化理解を深めるための科目を開設し，我が国の先人たちが積み上げてきた文化や伝統と同時に，異文化理解を深め，多元的な文化の受容力に支えられた倫理観，道徳観を涵養し，グローバル化による社会経済構造の変化に対応できる能力を培う。

こうした基本理念を具体化する重要科目として「教育と日本の伝統文化入門」を設置し必修化している。本居宣長『初山踏』，貝原益軒『和俗童子訓』，山本常朝『葉隠』，熊沢蕃山『集義和書』等を取り上げつつ日本人の考え方について理解を深め，学びの進め方や子育ての仕方を自覚的に学ぶことや，世阿弥，千利休，松尾芭蕉，吉田松陰，橋本景岳，西郷隆盛等の歴史的価値と功績を通して伝統と革新の意味を深く学ぶことを行っている。

本稿では，その中から日本文化の重要性を「おもてなし」「茶道」という視点から構成した講義内容について，その内容と成果について考察したい。講義タイトルは「日本の心・おもてなしの心―伝統文化・茶道への入り口―」であり，成果検証については受講者である大学１回生の授業後の感想を取り上げる。

３．講義「日本の心・おもてなしの心－伝統文化・茶道への入り口－」の概要

講義は次の４点によって構成している。（２コマ扱い）

A　教育基本法，学習指導要領等における伝統・文化教育の変遷とその取り組みの価値
B　現代における「日本らしさ」「おもてなし」の具体化
C　小学校国語科教材「和の文化を受けつぐ」(小学校５年・東京書籍）の話題理解と主張点
D　千利休の功績と現代的意味

Aについては，「伝統や文化に関する教育の可能性（１）」(『人間教育学研究』第２号，PP.173-180）において詳述した。

Bでは，日本らしさや和文化の良さが現代に生きる事例を取り上げた。具体的には，ジュスカ･グランペール（インストゥルメンタル・アコースティック・デュオ）の「桜の保全活動」，丸亀製麺の「日本らしさ」戦略，日本の心を歌いたいというクリス･ハート（歌手）の活動を取り上げている。

Cでは，教材文の主たる話題である「和菓子」について，その成立と伝統行事や日本文化との関わりについて解説し，「和菓子」とその良さを守るためには和菓子職人だけではなく，和菓子作りを支える道具職人と和菓子を食べる人との三者が必要であることを強調した。

Dでは，千利休の「香炉」「花入れ」「朝顔」「木守り」のエピソードを取り上げ，その才能の非凡さや生き方・考え方の価値について解説した。そこから『お茶をはじめてみよう』(2007年２月，淡交社）に取り上げられている「茶の湯から学ぶこと」11項目を例に茶道で教えられていることと日常生活の道徳性・規範性の関わりについて学修を深めた。

以下，ＢＣＤの内容について，学生の感想をもとに詳述したい。

４．現代における「日本らしさ」「おもてなし」の具体的事例【「項目Ｂ」に関する学修】

ジュスカ・グランペールは，吉野山の千本桜の保全活動への呼びかけ，周知活動に取り組んでいるグループである。その具体的な活動のビデオ視聴後，「自分

の足で立っている日本のこと，和のことを『こんないいものがあるよ』っていうことを伝えたい。万葉の時代から歌にも詠まれ，愛されて来た吉野のシロヤマサクラをずっと守っていきたい。」という言葉を紹介した。

丸亀製麺の海外展開における「日本らしさ」戦略では，日本の当たり前の光景が海外の人には珍しいものであり，大きな付加価値となっていることを取り上げた。具体的には，（1）製麺機―打ちたての麺を提供すること，（2）日本の味―讃岐風のあっさりした出汁を用いること，（3）臨場感―作っている様子，厨房を見せることに加えて，何よりも（4）日本式の接客（料理を両手で差し出すこと，食器などの衛生面に気を配ること，接客やマナーの質を高めること）などが重要な戦略となっていることを強調した。

クリス・ハート（歌手）は，中学時代の茨城県でのホームステイ体験が来日の契機となり，「日本のポップス」を歌い続けている歌手である。「日本人じゃなくても日本人と同じ生活をすると十分に同じ気持ちを理解できると思う。日本人になれないけれど，日本人のストーリーとか日本人の生活は理解できるはずだ。その思いを歌うことに込めたい。」という日本への思いと歌の魅力を紹介した。

講義は，「日本らしさとは何だと思いますか」「日本の良さを外国の人に説明してみましょう」という問いかけから始めている。学生たちは一生懸命考えてくれるが，「全く思い浮かばない」「日本人でありながら日本らしさについて意識したことがない」という声が多数である。「四季がある」「ご飯」「すし」「うどん」といったつぶやきがかろうじて聞こえてくる。日本の伝統文化の特徴としてとらえられているわけではない。当たり前になりすぎて日本らしさについて考えたことがないということかもしれない。ジュスカ・グランペール，丸亀製麺，クリス・ハートの３事例について，学生たちは次のような感想を述べている。

・私は日本人なのに，日本らしさや日本の文化について知らなさすぎたんだと思った。日本の文化が海外で知られつつある中で，私は日本のことを聞かれても答えられない。そんな状態なのに私は違う世界が見て見たいと思って海外へ行こうと考えていた。自分の国のこともろくに知らないのに，海外に行ったって何も身に付かないのではないかと思った。海外の人は日本のことをすばらしいと言ってくれる。関心が高い。にもかかわらず私は…である。もっと日本のことに関心を持ち，ジュスカ・グランペールのように，「日本にはこんな素晴らしいところがいっぱいあるよ」と伝えられるようになりたい。

・丸亀製麺は「日本らしさ」を戦略に海外進出で成功を収めている。「おもてなし」の心が，海外では評価が高いことが理解できた。お寿司やうどんなどの料理そのものだけではなく，日本式の礼儀正しい接客の仕方が付加価値だというとらえ方をしたこともなかった。小さな心配りや気遣いは，日本だけではなく世界中の人にとって大切なものだと思う。

日本の「食」は大きな支持を得ている。その魅力を正しく普及させていくことは重要である。一般消費者に日本食・食文化の魅力を伝える料理を提供する海外の日本食レストラン等の増加も見込まれている。

また，平成25年12月4日には，ユネスコ無形文化遺産として「和食；日本人の伝統的な食文化」が登録された。「無形文化遺産」とは，芸能や伝統工芸技術などの形のない文化であり，土地の歴史や生活風習などと密接に関わっているもののことである。

歴史や生活風習などと密接に関わっている世界最高水準の品質を誇る日本の暮らしぶりの価値について，学生たちは気づき始めている。「私は日本のことを聞かれても答えられない」「日本の素晴らしさが伝えられるようになりたい」は素朴だが，「教育と日本の伝統文化入門」という科目名が示す「入門」は，日本の伝統・文化の理解を深める契機である。

５．小学校国語科教材「和の文化を受けつぐ」（小学校５年・東京書籍）の話題理解と主張点

【「項目Ｃ」に関する学修】

「和菓子」の歴史は古く，「和の文化を受けつぐ」では，戦国時代から安土桃山時代に伝えられた南蛮菓子の製法が日本の菓子作りに応用されていったことが記述されている。砂糖菓子として金平糖が取り上げられている。また，年中行事の雛祭りや端午の節句と結びついた和菓子として，菱餅，草餅，柏餅，粽などが取り上げられている。

講義では，ポルトガル語の「confeito（コンフェイト）」を語源に持つ金米糖を独自に発展させた160年の歴史を持つ京都老舗の製造の様子をビデオ視聴した。気温や天候によって蜜の濃度や釜の角度と温度を微妙に調整し，釜で転がる金平糖の音を聞き状態を見極めて五感を使いながら作られる金平糖の製造過程に学生たち

は驚いていた。

また，粽については，狂言の茂山親子が五月の節句に食べる様子を紹介した。粽のいわれを聞き，粽を食べ笑顔になる息子の様子が印象的であった。

教材文は和菓子の紹介を行った後，「では，その和菓子の文化は，どのような人に支えられ，受けつがれてきたのでしょうか。」と話題を展開する。そして，「和菓子を作る職人たち」「和菓子作りに関わる道具や材料を作る人たち」「和菓子を食べる人」の三者によって和菓子文化が支えられていることが明示される。そこから「わたしたちが季節の和菓子を味わったり，年中行事にあわせて作ったりすることも，和菓子の文化を支えることだといえるでしょう。」と和菓子作りに関わる職人だけでなく，それを味わい楽しむ多くの人の支えが和菓子文化に不可欠であることに言及している。

和菓子の文化を構成する「職人」「道具や材料」「食べる人」のトライアングルの成立は，和菓子に限らず，日本の文化全般に共通であることを結論として教材文は締めくくられている。

こうしたとらえ方は新鮮であり，学生たちは次のような感想を述べている。

・日本の金平糖が，ポルトガルの金平糖とは異なり，日本独自のオリジナリティーあふれるものに発展させていったというところに心引かれました。しかし，和菓子を作るプロの職人がいるだけでは和菓子は廃れてしまうという教材文を読んで，確かに「和菓子を作る人」「和菓子を作る職人が使う道具や材料を作る人」「食べる人」の三者がいなければダメだと思いました。職人・道具を作る人・食べる人という三つの柱が合わさって和菓子としいう伝統文化が受け継がれていきます。和菓子だけでなく，地域の伝統行事なども同じだと思います。自分たち若者が受け継いでいかなければ，日本そのものが消滅してしまうのではないかと思います。

・和の良さについて，身近にあるものでも知らないことがたくさんあることを学びました。和菓子や茶道の礼儀など，知らないことがいっぱいありました。自分は本当に見ていないのだと思いました。一口に和文化といっても，何が，どこまでが日本の文化なのか，分かっていないことばかりだと思いました。「道具や材料がなければ職人は和菓子を作れない」「職人がいなくなれば和菓子は作られなくなる」「何よりも食べる人がいなければ作られることもない」，確かに言われてみればその通りですが，そんなことを考えたことはありませんでした。これからは少し意識してみようと思います。

教材文の読解から気づきをさらに広げ，自分自身の日本文化との関わりについて記述している感想も出されている。

・現代の日本は，自国の和文化よりは西洋文化を重視し，西洋化しているような気がする。日常生活でも大福や団子ではなく，ケーキなどの洋菓子を買う人の方が多い。スーパーのブースでも洋菓子の方が圧倒的に広い。町の風景でも和菓子店よりは洋菓子店の方が多い。行列を作っているのも洋菓子店だ。しかし，海外に住んでいる私の祖母は，日本のものをよく褒めてくれる。例えば日本の蚊取り線香は香りが良いし，何よりも効き目が良いと言っている。日常生活の中に日本の良さは埋め込まれている。日常の中に当たり前に紛れ込んでいる日本にしかないものに気づいていきたいと思う。日本に来た留学生が日本を気に入り，永住する人もいる。それほど日本は美しく，すばらしいところなのだと思う。日本人はもっと日本のことを誇りに思ってもいいのではないか。私は洋菓子よりも和菓子が好きだし，日本の風景も好きである。また，和菓子についても，その一つ一つに名前を付け，大切にしているのはすごいことだと思う。和菓子に季節を反映させるためには，知識や感性，それを具現化する想像力も必要となる。私自身も日本の良さについてもっと学んでいかなければと思う。

和のものがなくなれば和文化が消えてしまう。「日本らしさ」といわれても説明することができない。意識することがなければ，通り過ぎてしまうことばかりである。伝統・文化教育と「体験すること」の結びつきは強い。同様に「知ること」も重要である。「日本よりも海外のものの方がすごい」と思い込んでいる学生も多い。大学生にとっては，足元の日本理解の動機付けとなる「教育と日本の伝統文化入門」という科目による情報提供が不可欠である。

6. 千利休の功績と現代的意味

【「項目D」に関する学修】

千利休については，様々な取り上げ方が可能である。茶人としての利休を茶道の作法から吟味することも多く行われている。しかし，本科目では「教育と日

本の伝統文化入門」の基本理念をふまえ，利休を歴史上の偉人としてその業績を列記するのではなく，その時代の革新家・イノベーターとして，現代に置き換えるように取り扱っている。伝統・文化の理解は，現在のシチュエーションに置き換えると分かりやすい。千利休を過去の一茶人として史実の確認作業にせず，現代社会の文脈の中で理解するように心がけた。イノベーター以外の用語としては，「クリエーター」「プロデューサー」などを意識している。講義で実際に使用したのは「先人たちの底力知恵泉(NHK 総合)」(放送日：2014 年 6 月 3 日前編，6 月 10 日後編）の番組タイトル「戦国のプロデューサー」である。社会構造の変革，衝撃という意味合いから，「サプライズ」「価値転換」「コピーライター」「ネーミングセンス」「パーソナリティ」といった用語も用いている。

講義では，利休の卓越した才能を示すエピソードとして「香炉」「花入れ」「朝顔」「木守り」の 4 つを取り上げた。「香炉」「花入れ」「朝顔」は「意外な演出」を示すエピソードであり，「木守り」は「新たな価値基準の創出」を示すものである。

【それぞれのエピソードの概略】

「香炉」〈名物はなくとも茶会はできるという利休ならではの演出〉

・当時の茶会では貿易によって手に入れた希少価値を持つ「唐物」といわれる「茶入れ」を持つことがステイタスであったが，23 歳のとき初めて茶会を開いた利休には到底手に入れることは不可能であった。

・その時，利休が持っていたのは「香炉」(当時，茶入れよりずっと安く誰もが見向きもしない代物）であり，利休は「香炉」と「茶入れ」との大きさがほぼ同じであったことから，「茶入れの袋」に「香炉」を入れかざっておいた。

・茶会が始まり，茶を立てようとした時，利休は，「茶入れの袋」から「香炉」を出し，無言で香を焚き，香りを楽しんでもらいながら，茶を振る舞ったという。

「花入れ」〈「花入れ」があれば花を飾るのは当たり前という常識を覆した茶会〉

・ある茶会では，床の間に飾った「花入れ」があったにもかかわらず，そこには花が生けられていなかった。不思議に思った茶人たちが「花入れ」に近づくと，「花入れ」の口すれすれに，水があふれんばかりに入っていた。

・首をかしげている茶人たちに，利休は，「本日は，どうぞ皆さまの想像の花を自由に生けてください。」と言った。

「朝顔」〈たった一輪の花に「美」を集約した利休の演出〉

・秀吉が利休の屋敷の庭一面に，見事な朝顔が咲き誇っていることを聞きつけ，茶会を開くように利休に命じた。秀吉が訪ねると，庭の「朝顔」は全て利休によって摘まれていた。

・いぶかしげに，秀吉が茶室に入ると，そこには一輪の「朝顔」が床の間に生けられていた。

「木守り」〈利休のネーミングセンスが生み出すブランド世界〉

・利休は長次郎に「木守」という赤楽茶碗を作らせた木守とは秋に実った柿を来年も実るようにと 1 つ残しておいたもののことである。来年の木守を連想させる「木守」を皆こぞって欲しがったという。

・名前をつけた瞬間にストーリーが生まれ，新たな価値基準が生まれた。

※それぞれのエピソードの画像は「先人たちの底力知恵泉(NHK 総合)」による。

4 つのエピソードを取り上げ，その才能の非凡さや卓越さについて解説した。意外性のやり過ぎは，相手を不愉快につながる場合もあることから，ギリギリのさじ加減がセンスを問われる能力であることを強調し，これらのアイデアセンスは，利休の豊富な知識や

経験に支えられていることであり，生き方や考え方が直裁に反映されることを付加した。

こうした利休の「アイデアセンス」「サプライズ」「価値転換」等について，学生たちは次のように述べている。

・戦国のプロデューサーとも呼ばれる千利休は，茶道家として名前は知っていたが，どのようにすごかったのかを今回知った。既存の価値を知っているからこそ，読み替え・価値転換するできる。ものごとの常識を知っているから，意外性や驚きを与えることができるのだと感じた。常識をくつがえし感動へと変化させる，その発想が豊かだと感じた。「おもてなし」は茶道に限られたものではない。日常に置き換えて考えるととても分かりやすいものだった。自分自身が伝統や文化から日本が大切にしているものを理解していきたいと考えた。日本人として大切にしていきたいものを自覚し，それを表現し，広げていく手段は多くあると思う。

・千利休の発想力，創造性の高さに驚いた。常識は常識としてある限り，固定観念として心に染みついているので，それを疑うことはない。利休のように当たり前を疑ってみること，常識にとらわれない答えを自分で生み出す力が必要だと感じた。そのためには豊富な知識とその知識を生かす力が必要になる。身近なことやものに興味・関心を持ち，その生い立ちや歴史，なぜそうしているのかといった理由などを考えていくことが大切だと思う。

意外性，発想力，創造性，固定観念といった言葉を用いて，学生たちは，利休の実像に迫ろうとしている。過去の時代に閉じ込めるのではなく，現代でも同様の取り組みが求められていることへの気づきである。

講義の最後では，『お茶をはじめてみよう』(2007年２月，淡交社）に取り上げられている「茶の湯から学ぶこと」11項目を取り上げた。配布したワークシートは次のようなものであり，11項目のうち６項目について空欄を設け，埋めさせている。

誤答率が高く，正答を聞いた学生たちが最も驚いた項目が「(10)「指先にまで気を配る」しぐさを美しく」であった。授業後の学生の感想でも，この項目について触れていたものが多かった。言われてみれば…というところだが，そうした発想やとらえ方をしていないということである。しかし正答が示されると，なるほどという声も多く出され，その内実を納得することができたところに注目したい。

以下の感想は，６問中１問しか正解しなかったという学生の感想である。

・茶の湯に学ぶことの11項目のうち，６問中一つしか正解しなかったけれど，正解を見るとどれも必要なことだと思いました。一番大切だと思ったものは11番目の「姿勢を正しく」です。なぜかというと，見た目を美しくすることでなかみの良さが伝わると思ったからです。頭のてっぺんから指先，足先まで美しく整えることで，意識が高くなると思います。もう一つ大事だと思ったのは，５番目の「季節を感じる」です。日本文化と季節の変化　は切り離せないと思うからです。私も海外の人と話をしたときに，日本の季節のことが話題になったときに盛り上がりました。そのとき，和菓子の銘のことなどを知っていれば，もっと盛り上がったかもしれないと思いました。

このワークシートについては，次のような感想も多く出されている。

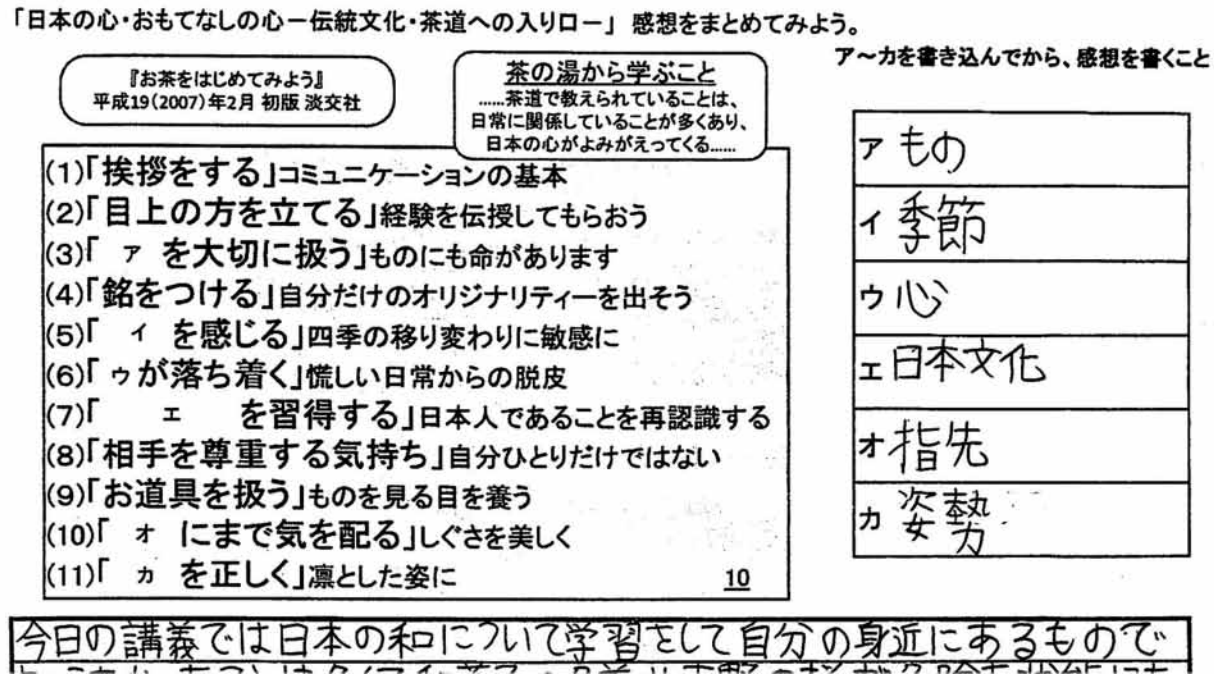
・茶の湯に学ぶこととして，一番驚いたことは，「指先にまで気を配る」ということです。しぐさを美しくするということですが，ふだんは指先を意識することはありませんでした。「指先にまで気を配る」は，部活動の時には考えたことがありますが，日常生活では意識していませんでした。正しい姿勢，立ち方や座り方などにも気を付けたいと思います。茶の湯に学ぶことの11項目は，一言でいうと人としてどうあるべきかだと思います。

茶の湯に学ぶことの11項目から，茶道体験を想起した感想も出されている。

・私は小さい頃にちょっとだけお茶をしたことがありますが，その頃はただ単純にお菓子が食べられる楽しいひとときという感じでした。今思えば作法や礼儀についても教わったはずですが，あまり覚えていません。この大学では日本文化が講義という形で組み込まれていますが，そうしなければ和文化について意識することはなかったと思います。今の私たちは，和文化を守り，受け継ぐということについて考えることがないからです。自分の出来る範囲で，文化を守る活動やボランティア活動などにも取り組んでいきたいと思いました。

・私は小さい頃茶道を習っていたが，何も考えず，感じずにやっていた。お茶だけではない。奈良に生まれ，奈良に育ってきたのに，奈良のことについて何も知らない。触れようともしないし，知ろ

［ワークシート例］



「日本の心・おもてなしの心ー伝統文化・茶道への入りロー」 感想をまとめてみよう。

『お茶をはじめてみよう』
平成19(2007)年2月 初版 淡交社

茶の湯から学ぶこと
……茶道で教えられていることは、日常に関係していることが多くあり、日本の心がよみがえってくる……

(1)「挨拶をする」コミュニケーションの基本
(2)「目上の方を立てる」経験を伝授してもらおう
(3)「 ァ を大切に扱う」ものにも命があります
(4)「銘をつける」自分だけのオリジナリティーを出そう
(5)「 ィ を感じる」四季の移り変わりに敏感に
(6)「 ゥが落ち着く」慌しい日常からの脱皮
(7)「 ェ を習得する」日本人であることを再認識する
(8)「相手を尊重する気持ち」自分ひとりだけではない
(9)「お道具を扱う」ものを見る目を養う
(10)「 ォ にまで気を配る」しぐさを美しく
(11)「 ヵ を正しく」凛とした姿に

10

ア～カを書き込んでから、感想を書くこと

ァ	もの
ィ	季節
ゥ	心
ェ	日本文化
ォ	指先
ヵ	姿勢

今日の講義では日本の和について学習をして自分の身近にあるもので

うともしない。もしかすれば，近すぎて見えていなかったのかもしれない。だからこそ，知ろうとする力が必要だと思った。グローバル化といわれる今だからこそ，自国のことを学んでおかなければと感じた。日本人として生まれてきたことは特権だと思うから，その特権を生かす必要があると思った。

・中２と高２の時に茶道の授業がありました。挨拶の仕方，お茶の飲み方，お茶やお菓子の渡し方などを教えていただきました。茶道の授業の最後の方では，百人一首まで覚えさせられました。厳しい先生でしたが，その授業では日本のことがすごく学べました。私の家には，和室はありますが，お琴とおもちゃとタンスが置いてあるだけです。その和室でお茶などができれば本当にすてきだなあと思います。

体験は，その意味や価値に気づくメタ認知的な段階を経て経験化する。学習の基本である。「何も考えず，感じずにやっていた」ことが，「楽しいひとときという感じ」や「日本のことがすごく学べた」というふり返りと結びついたとき，「教育と日本の伝統文化入門」の「入門」の役割が果たされたことになろう。

７．より質の高い「教育と日本の伝統文化」講義内容の構築を目ざして

「挨拶をする」「目上の方を立てる，敬う」などは，日常生活の常識である。「日本の伝統文化，昔のものを大切にしよう」に違和感はない。しかし，伝統文化を守る意味を「昔のことをずっと続けていくことであることだ」という学生が多いのも事実である。文化や伝統の中に位置付いている智恵は，予測困難な時代にあって，想定外の困難に処する判断力の源泉となる教養，知識，経験を与える。今までを生きるためではなく，これからを生きるための知恵である。今回の講義はゴールではない。継続した学びが必要である。だからこその「教育と日本の伝統文化入門」である。「入門」しなければ，学びは始まらない。次のような学生の感想に励まされつつ，より質の高い「教育と日本の伝統文化」に関する講義等の構築を模索したい。

・日本の洋風化は確実に進行していると思います。私の家にも和室はあるが，洋室の方が多いし，ふだん和室を使うことはないから，和室がなくても全く気にならないだろうと思います。和菓子も必ず食べなければならないものでもないし，必要なものではないかもしれないけれど，「落ち着く」「和む」と言われれば，確かに実感できます。欧米の影響が大きくなっている中で，和食，和室，和菓

子などに落ち着きを感じ，本能的に気分が和むのも事実です。この変化はさらに進んでいくように思うけれど，時代を超えて「和」という日本の象徴のようなものはずっと引き継き存在してほしいと思うし，私たちがその橋渡しをする必要があるように感じました。

・日本の伝統文化に関する勉強は確かにあったと思います。しかし私は，新しいものが好きだったため聞き流していました。しかし雛祭りやこどもの日がなくなってしまうのは本当に悲しく，寂しいことです。確かに今は和菓子を食べるよりは洋菓子を食べる機会の方が多いです。誕生日だって洋菓子です。すでにもう作られなくなった伝統的な和菓子がたくさんあるかもしれません。私たち若者がどうすれば伝統文化を守っていけるか，正直分かりません。しかし茶の湯に学ぶことの 11 項目なら，できるように思います。しっかりと実行していくことによって，後の世代に伝えることとはできます。私は日本人として基本的なことを守り，伝えていきたいと思いました。

引用・参考文献

（1）教育基本法（平成 18 年 12 月 22 日法律第 120 号）

（2）学校教育法（平成 19 年 6 月 27 日法律第 96 号）

（3）中央教育審議会答申「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（答申，平成 20 年 1 月）

（4）中央教育審議会答申「第 2 期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方」（答申，平成 23 年 12 月）

（5）中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（答申，平成 24 年 8 月）

（6）中央教育審議会教育振興基本計画部会「第 2 期教育振興基本計画について」（審議経過報告，平成 24 年 8 月）

（7）国立教育政策研究所「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原理」（教育課程の編成に関する基礎的研究報告書 5 ・平成 25 年 3 月）

（8）中央教育審議会「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」（諮問，平成 26 年 11 月）

（9）伊崎一夫，「『人間教育』に資する『これからのあるべき国語教室』の成立と展開（1）―『これからのあるべき国語教室』を支える三つの要件―」，2014.4，『人間教育学会研究紀要創刊号』，奈良学園大学人間教育学部

(10) 伊崎一夫，「伝統や文化に関する教育の可能性（1）―国語教育のアプローチ―」，2014.12，『人間教育学会研究紀要第 2 号』，奈良学園大学人間教育学部

(11) 桑田忠親『茶道の歴史』，1979.11，講談社

(12) 淡交社編集局『お茶をはじめてみよう』2007.2，淡交社

(13) 筒井紘一『利休の逸話』，2013.1，淡交社

(14) 岡本浩一『一億人の茶道教養講座』，2014.9，淡交社

(15) 英賀千尋『まんがで学ぶ利休の逸話』，2015.1，淡交社

(16) 橋本素子『日本茶の歴史』，2016.7，淡交社

(17) 日本放送協会『茶の湯裏千家茶の湯を楽しむ 2016 年 8 月～ 9 月』，2016.7,NHK 出版

(18) 依田徹『茶を好んだ人』，2016.8，淡交社